

令和7年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	8	学 校 名	静岡県立沼津特別支援学校 愛鷹分校	校 長 名	青木 暁乃
------	---	-------	----------------------	-------	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安全	生徒の主体性と人権尊重の理念に基づく教育実践と体制整備	・生徒や保護者が学校は安心して通える場所だと感じている。 ・教員は、互いに人権を尊重する対応が取れていると感じている。	・些細な変化への気づきや傾聴を大切に、生徒の気持ちに寄り添う対応を継続できている。 ・生徒や保護者が安心して過ごせる関係作りができている。	B	・生徒や保護者に対して、丁寧に対応することについての意識を高めることができた。 ・慣れによる形骸化を防ぐため、さらに日常の言葉遣いや同僚間を尊重する態度についても再確認し、心理的安全性の高い職場作りを継続していく。
	命を大切に作る行動力の育成と体制の強化	・教員・生徒が発災時に自分がとる行動が分かり、行動することができる。 ・生徒が、自分自身を含む周りの人が大切な存在であると感じている。	・防災訓練や安全教育の授業で発災時に自分がどう動くべきかを生徒と一緒に考える機会を設けたことで、訓練時にはスムーズに対応することができた。 ・生徒の所在不明や校外への飛び出し等、速やかに対応し、安全を確保できた。また、マニュアルを適宜改善し、緊急時対応の質を高めるように努めた。	B	・防災訓練等を通じ、教員・生徒が発災時の動きを具体的にイメージし、意識を高めることができた。 ・危機的な状況の際に、生徒がパニックになることを想定する等、より実践的な訓練内容を検討する。 ・危機管理における教員の対応事項は多岐にわたるため、緊急時に即応できるよう、視覚的で簡潔なマニュアルの整備を推進する。

専門	ニーズに応じた自立活動の実践	- 生徒が、自分の課題を認識し、達成しようと学習に取り組んでいる。 - 職員は、自分の学びが積み重なったと実感している。	- アセスメントに基づき、自立活動の授業を実践したことで生徒が主体的に取り組むことができた。 - 個別の指導計画の立案の際に、生徒から十分にニーズを把握することが課題となった。	B	- 個別の指導計画に基づき、生徒の課題を焦点化して指導を行うことで、自己理解を深めることができた。 - 自立活動以外の授業では、教科等の目標を達成することが主となり、個々の課題を解決する学習が十分に行えなかった。今後は、生徒のニーズを把握する方法を再検討し、授業の改善を図っていく。また、そのために、本年度から導入したOODAループの研修をさらに深めていくことも必要である。
	つながりのある支援と指導の充実	- 保護者が、年間指導計画上の学習の目標と内容の説明を受けている。 - 生徒は、自分の夢をかなえることに近づけると考えて、学習に取り組んでいる。	- 年間の見通しをもって、授業を実践できたが、保護者への説明としては改善の余地がある。 - ICTを活用したことで、教員と生徒の相互理解が深まり、生徒の主体的な学びが引き出せた。	B	- 面談に限らず、学習の取組状況などはInstagram等で発信したが、今後は学習の目的や成果なども保護者に十分伝わる方法について検討する。 - 教員が年間指導計画を見直し、各教科（国語、数学、職業等）や合わせた指導（ワーク工房・ワーク地域）等の内容について関連を図り、学校での学びがどのように生徒の夢を実現するのか、授業研究等をとおして検討を重ねていく。
連携	自立と輝きに向けた地域や関係機関との共同の充実	- 職員と保護者が学校運営協議会の支援を理解している。 - 取り組みに対する発信が、保護者や地域に伝わっている。	8月に実施した学校運営協議会には保護者が参加し、委員や参加企業と意見交換を図ることをとし、理解を深めることができた。 - Instagram等を活用し、日々の学習の様子を積極的に発	A	- 学校運営協議会に参加した保護者からは好意的な意見が多く寄せられたが、まだ一部では理解が十分でないという意見もあるので、引き続き情報発信に努める。 - Instagramでの発信頻度を高めたことで、学習の様子を可視化し、保護者や地域の理解を深めることができた。また学校だよりを発行し、ワーク地域先を始め、生徒の出身中学校等にも配布し、学校の紹介に努めた。

			信したこと で、保護者や 地域の関心 が高まった。		
	地域とつながりのあ る教育実践や地域へ の貢献	・生徒が、地域とのつながりや貢献を意識した活動を行っていると感じている。 ・学年を超えた交流や授業の取り組みができています。 ・共同学習の中で、高校の生徒と分校の生徒が、共に関わり合いが持っていると感じている。	・沼津城北高校との共生共育では、教員間で意思疎通を図り、交流場面の設定を工夫することができた。 ・作業学習を縦割りに変更したことで、学年を超えた生徒同士の関わりが深まっている。	A	・体育や家庭科の授業を始め、生徒会や部活動等での新たな交流の取組を複数実施できた。今後は、単なる交流に留まらず、授業交流の質的な向上や生徒同士が主体的に関われる場面の意図的な設定について、城北高校と連携して検討していく。 ・3年間を見通した校外学習の在り方を検討し、生徒が系統的に地域とのつながりを意識できるように学習を計画していく。また本校の特色であるワーク地域のこれまでの成果を整理し、地域に発信したり、生徒のニーズに合わせて見直しをしたりしていく。
チ ー ム	やりがいを持てる職 場環境の工夫	・教員は、学年・分掌で協働しながら自分の担当を責任もって行っている。 ・教員が同僚と一緒に学校を作り上げていると感じている。	・Teams や掲示板機能等により、ペーパーレス化及び会議の精選と情報共有の迅速化を図った。 ・定時退勤日の実施や業務分担の見直しを実施した。まだ一部の教員によって仕事に偏るので引き続き平準化に努める。	B	・ICT の有効活用により連絡事項のデジタル化が進み、会議時間の削減や情報共有の迅速化を図ることができた。 ・職員の人数が少ないため、1人が2つの分掌を担当したことで滞りなく業務を進めることができた。しかし、時期によって、業務が一部に集中するため、2つの分掌の組み合わせ方や年間を見通した役割分担を見直し、負担感軽減に努める。